

川喜田久太夫本宅 部材調査報告書

概要版

内容

I	調査概要	1
I-1	調査目的と内容	1
I-2	調査の組織	1
II	沿革	2
III	規模・形式の概要	3
III-1	規模	3
III-2	洋館構造形式	3
III-3	和館構造形式	3
IV	破損状況（部材保管状況）	3
IV-1	洋館	3
IV-2	和館	4
V	各部の改造	4
V-1	洋館玄関ホール右面の撤去部分について	4
V-2	洋館玄関ホールの大正8年の改造について	4
V-3	洋館玄関ホールの床撤去について	4
V-4	洋館ベランダ前端ベイのベイウインドウ	4
V-5	洋館ベランダ左側の欄間について	5
V-6	洋館一・二号室について	5
V-7	和館葵の間の床について	5
V-8	和館茶室について	5
VI	考察と復原再建に向けて	6
VI-1	部材調査結果	6
VI-2	資料の新発見と復原考察	6
VI-3	復原再建に向けて	6

附図

資料1～4、追資料1～17

I 調査概要

I-1 調査目的と内容

本調査は既報（「旧鈴鹿荘実測調査記録」※）を基礎資料とし、奈良県大宇陀市に解体・保管されている川喜田久太夫（半泥子）本宅の各部材について残存状況を把握し、千歳山における復原再建と保存に関する資料を供することを目的として行われたものである。※昭和59年度三重大学等による実測調査の報告

a) 資料収集および分析

既報に関する一次資料のまとめと新たな資料を既報の資料に追加した。（追資料-1～17）

b) 実測および現状把握調査

各部材を棟毎（洋館・和館・付属棟）・部位毎に判別・分類した。主要軸部材については番付（横軸に「い、ろ、は・・・」、縦軸に「一、二、三・・・」等の記号を付す。）を確定し、姿図として記録した。その他部材は数量・番付を確認し、必要に応じて形状・寸法を計測した。建具は数量と位置の確定を、石材は数量・形状・寸法を計測した。また、各部材の損傷状態を観察した。

c) 復原調査

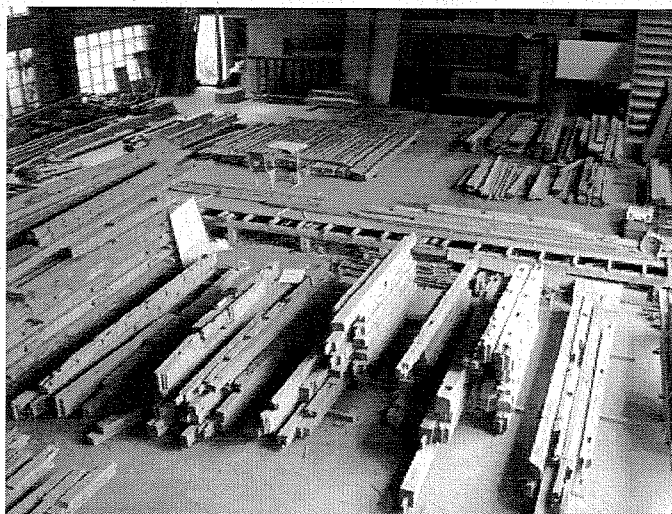
各部材と既報を照合し、旧鈴鹿荘当時の形状・仕様を把握した。既報では不明とされた部分を再現した。次に既報の復原調査をもとに部材の痕跡を確認し、復原図を部分的に作成した。

d) 写真撮影

調査開始前の保管状況、調査状況、調査後の片付状況、および部材・建具詳細等について写真記録した。今回調査はカラー撮影、デジタルデータ保存とした。

I-2 調査の組織

調査は有限会社伊藤平左エ門建築事務所が受託し、国立大学法人三重大学との共同研究で実施した。なお、調査期間中には現地にて、飯田喜四郎 名古屋大学名誉教授の視察・助言を得た。なお、調査にあたっては天理教宇陀分教会の協力を得た。



部材調査状況

Ⅱ 沿革

川喜田久太夫本宅は津市の千歳山の小高い丘陵を占める川喜田久太夫の邸内に貴賓の接待用として建設されたものであり、大正3年の竣工である（既報告のまま 資料-2は明治44年～大正2年竣工とする）。

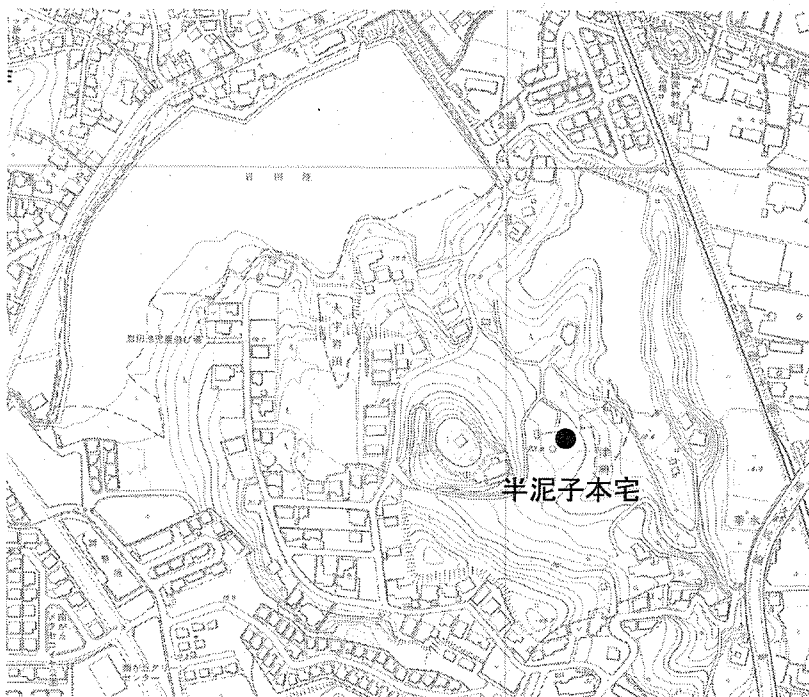
建物の設計は大江新太郎、施工者は未詳である。その計画案は明治44年の「東京勸業展覧会出品作品図案集」（資料1）で既に「伊勢国千歳山ニ建築セラルベキ」、「紳士住宅」として発表されているが、実施に当っては計画案を縮小している。竣工後間もない大正8年には、田辺淳吉の設計により、玄関ホール（当時広間）が改装されるなど、千歳山当時も何度かの改造が重ねられていた事が知られる。

川喜田久太夫の寄贈により、昭和18年、鈴鹿海軍工廠に移転された。工廠では牧田村（現鈴鹿市平田町）地内に同年竣工した第一会議所（高等官集会所）に並べ、会議所に附属する貴賓室として用いられた。

鈴鹿電気通信学園の外人宿舎として、昭和25年に鈴鹿市江島に再移築がなされた。その後、日本電信電話公社の職員クラブ鈴鹿荘として利用され、増築、修繕が重ねられた。鈴鹿電気通信学園の規模拡大に伴って、鈴鹿荘の施設は狭小となり、昭和60年3月には増築宿泊棟、浴室、車寄などの増築部が撤去されている。



千歳山位置図



半泥子本宅位置図

Ⅲ 規模・形式の概要

Ⅲ-1 規模

- a) 洋館 間口 12,461m/m 奥行 9,511m/m
平面積 一階 115.10 m² 二階 111.08m² 計 226.18m²
- b) 和館 間口 12,950m/m、奥行 11,042m/m 平面積 142.99m²

Ⅲ-2 洋館構造形式

木造二階建、左半部前後棟切妻造、右半部左右棟支棟切妻造、鉄板葺

Ⅲ-3 和館構造形式

桁行実長6間半、梁間実長5間、入母屋造、棧瓦葺（部材なし、既報より）、背面1間庇、左側背面寄りに洋館に連結する渡廊下が接続する。間取りは、葵の間（10帖）と楓の間（8帖）を続き間とし、その背面に茶室（4帖半）と梅の間（6帖）を設け、四方に1間の縁を構える。 ※呼称は鈴鹿荘当時

Ⅳ 破損状況（部材保管状況）

Ⅳ-1 洋館

【基礎】保管石材の総見付面積は切石積10.7m²、見切石4.9m²で、既報図面より算定される見付面積に対して各91.4%と67.0%に相当する。屋外に保管されていたが、建物に取付いていても条件は変わらないので、風化・劣化についても問題ない。

【軸部】保管部材全体のなかで、相対的に洋館軸部材が長・径ともに大きいので、積み上げられた部材の最下層に保管されていた。保管場所の土間は仕上のない地表面のままで、湿気が多い。枕木とともに1

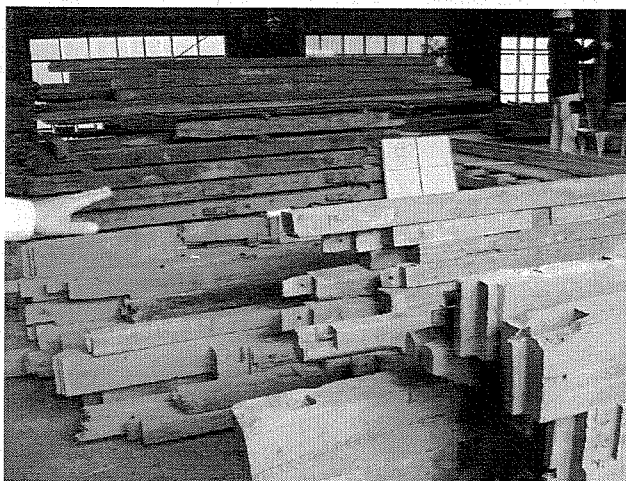
～2・3層目位までの部材は腐朽していた。

柱材では通し柱総数18本のうち6本腐朽、1本番付不明。管柱は総数43本のうち8本が番付不明で腐朽材はない。材積では73.5%が残存・健全、16.3%が腐朽、10.2%が番付不明となる。

二階床組材は保管状態が良く、胴差の1本を除くすべてが健全であった。材積では96.8%が残存・健全、3.2%が腐朽、不明材はない。

左半部小屋組では陸梁2本と方杖1本が腐朽、右半部では敷桁2本が腐朽している。小屋組材全体は材積で58.9%が残存・健全、13.9%が腐朽、27.2%が所在不明となる。

【外部造作】 残存する付土台・付柱・飾貫の総見付面積は42.8m²、既報図面より算定される見付面積に対して54.3%に相当する。ベイウインドウや大小の庇、ガラリ窓などは大バラシ状態で保管されていた。



部材調査状況

【内部造作】ほとんどの部材が倉庫の2階に保管されていたので保管状態は良い。

IV-2 和館

【軸部】柱材は総数33本のうち6本が不明、倉庫内2階に保管されていたので腐朽はなく状態は極めて良い。材積では86.4%が残存・健全となる。

小屋組材は洋館と同程度に長大のため、1階最下層に保管されて腐朽が進行していたが、ほとんどが原形はとどめていた。小屋組材は材積で59.2%が残存・健全、40.8%が腐朽、不明材はない。

【その他】母屋は比較的状态は良いが、野棟木は約2/3が腐朽する。挿母屋は8本中6本が健全、2本が腐朽していた。桔木は既報図面に描かれた12本すべてが状態よく残されている。破風板4枚はすべて健全である。

建具のほとんどは保管倉庫とは別建物の室内にあったので状態は極めて良い。他の建具に挟まれていたもので、杉戸と襖の絵は解体時からの劣化はとどまっていると思われる。

V 各部の改造

V-1 洋館玄関ホール右面の撤去部分について

玄関ホール右に延びる棟（以下右棟）については、追資料-1の平面図では平面規模と間仕切位置が分かる。追資料-13では、腰見切石が他よりおよそ2段分低いので、一階床も同程度に低いものと考えられる。ただし、追資料-6では写真右端に扉があり、敷居は玄関ホール床よりさらに高い。右棟へ至るにはその内部に見切石約3段分相当の段差（階段か）がなければならない。

V-2 洋館玄関ホールの大正8年の改造について

追資料-6は大正8年改造後の状況を示しており、鈴鹿荘当時とほとんど変わらない。追資料-1～12が同時期のものであるので、そこに写る一連の改造は近い時期に行われたものと考えられる。当時の玄関に関する痕跡は、部材からは確認されなかった。

V-3 洋館玄関ホールの床撤去について

追資料-5・6から、玄関ホール一連の改造の中で、床から土間へと変えられたことが分かる。腰掛高さを下げた痕跡は部材でも確認できる。なお、当初の玄関が存在した時は、玄関内で上下足の履替えが可能であるが、改造後（鈴鹿荘当時まで）は少なくとも玄関ホールまでは下足履範囲である。

V-4 洋館ベランダ前端的ベイウインドウ

追資料-14ではベランダ左面前端（い一～い三）は2連の窓である。追資料-3ではベランダ正面（い一～は

一)はベイウインドウ(出窓)となり、追資料-4ではベランダ左面前端(い一〜い三)に庇が付く。この2階部分には渡り廊下(デッキ)のような構造物が取付いている。資料-4に写るベランダ左面ベイウインドウは、別棟の渡りが取付くまでの中間期の状態と考えられる。

V-5 洋館ベランダ左側の欄間について

追資料-14ではベランダ左面後方の3間(い三〜い七)は、建具がなく開放である。この前寄り1間に石段が取付く。追資料-4ではガラス戸を入れてベランダを部屋内とする。階段を煉瓦積として全幅に広げ、開口上部には庇を掛けている。この形態は鈴鹿荘当時とほぼ同じである。

V-6 洋館一・二号室について

追資料-1では一・二号室は「次ノ間」・「寝室」と表記してある。二号室・物置間に建具による仕切りはない。左面には5ヶ所同形の窓が描かれ、これは追資料-4・14にも写っている。ところが、鈴鹿荘当時は最前1ヶ所(い一〜三)の窓がない状態であった。窓を塞がなければならなかった理由は、別棟渡廊下(デッキ)の取付きと関係があるかもしれない。

V-7 和館葵の間の床について

追資料-1に二帖の上段と付書院が描かれており、追資料-10ではその詳細が分かる。部材調査では「ほ三」、「へ五」柱、「と三」柱に、床框、付書院の地板・鴨居、上段・付書院の天井の各痕跡が確認された。上段の落掛※と上部小壁痕跡は移築時の改修により残されていない。 ※上部の小壁を受け止める横木

V-8 和館茶室について

追資料-1で平面形状が、追資料-12より床廻りの詳細が分かる。部材調査では「は五」柱、「へ五」柱「へ八」柱の痕跡から他室より低めた内法高・天井高が分かる。「は又六」柱は発見されず所在不明である。茶室左の水屋については追資料-1にて平面形状は分かるが、写真は発見されていない。

VI 考察と復原再建に向けて

VI-1 部材調査結果

川喜田久太夫（半泥子）本宅は、大正3年の建築以来、大正8年の改造、昭和18年と25年の2度の移築を経て、昭和60年に解体されるまで66年間建築物として霜雪に耐えてきた。その後、今回の調査まで26年間倉庫内で部材として保管されてきた。解体時の目的を「移築再利用」などとされたであろうことが、保管状況から窺える。保管部材には解体・再使用が困難な、洋館の壁・床・暖炉廻りの寄木・石・煉瓦・タイルや、和館天井板などが含まれておらず、また、容易に代用が可能な野地板や荒床なども残されていない。倉庫の仕様・環境からみて、保管期間は数年間程度の想定ではなかったであろうか。残念ながら洋館・和館とも長大材が地表面近くにあり、小屋組材の約4割が腐朽や損失を免れなかったが、腐朽材については長大材であるために形状は保持されていた。その上に置かれていた柱材は8割近くが健全な状態で残り、化粧材は倉庫二階の好環境下、和館建具は別棟の室内に保管されるなどの工夫もあり、26年の経過に比して部材の状態は良好であったと評価できる。

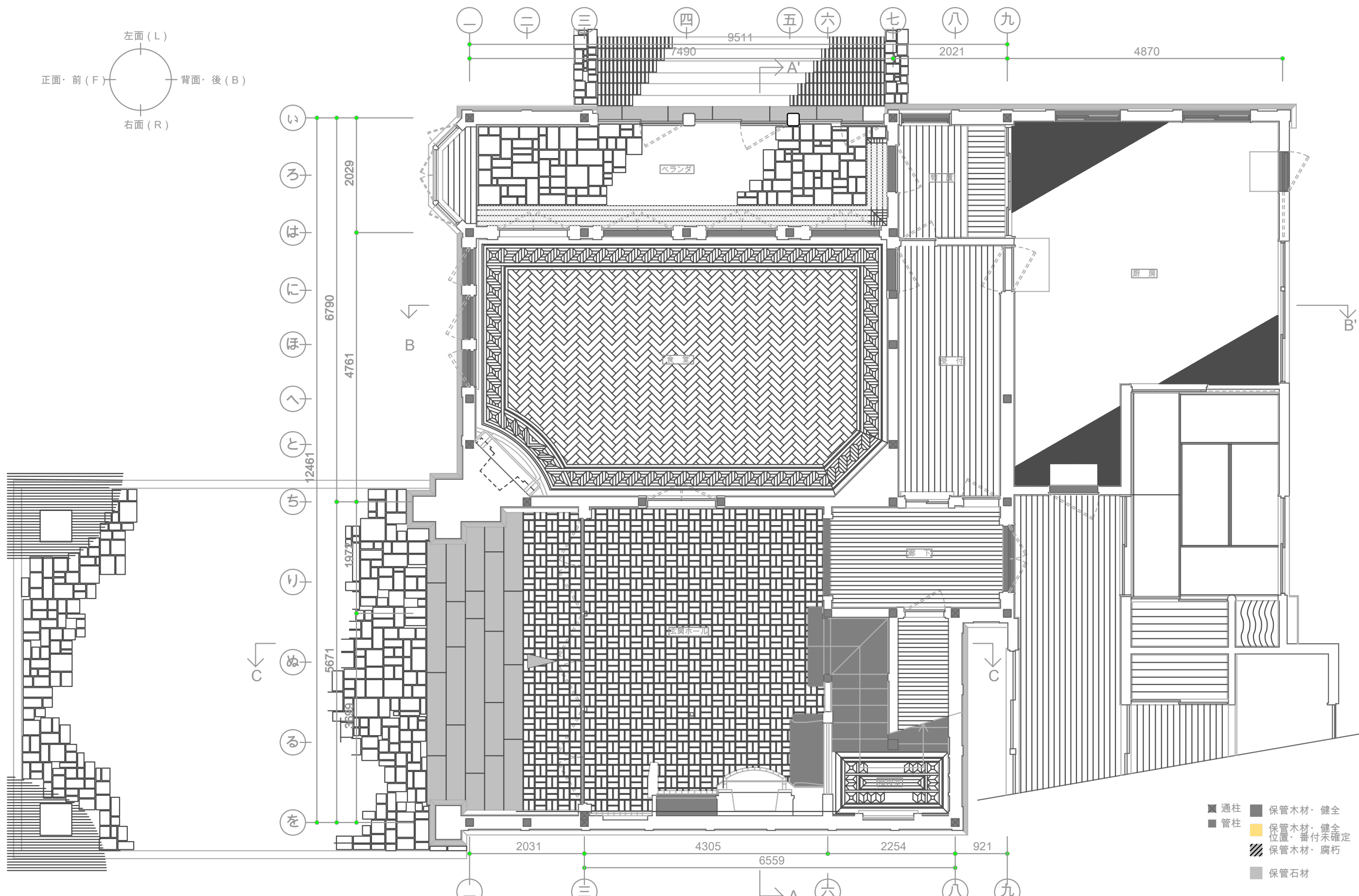
VI-2 新資料と復原考察

追資料-13～17は大正3年の建築当初、追資料-1～12は大正8年の洋館改造後を示している。洋館改造後の形態は解体前の鈴鹿荘当時までよく残されており、部材調査結果もこれと整合する。追資料では左方に別棟が付属するが、このことにより資料-4が洋館改造後～別棟付属前のものと新たに分かった。これには洋館の後方に下屋も写っていない。この状態が資料・建物調査・部材調査を総合して、最も矛盾がなく復原に相応しい状態と判断される。

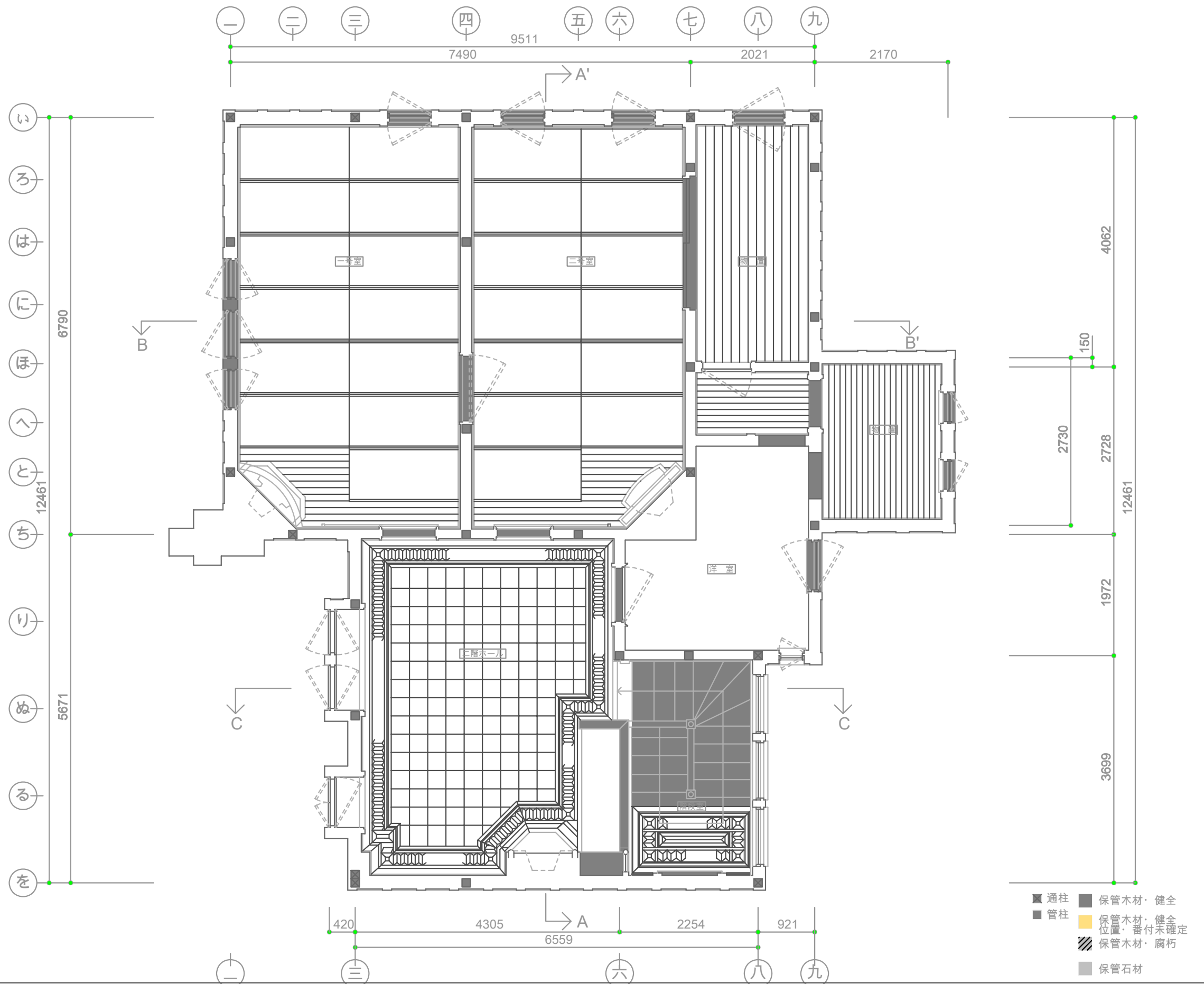
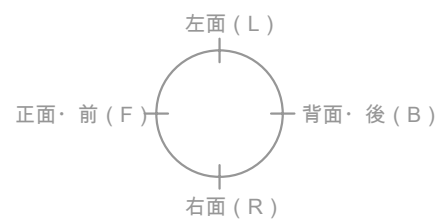
VI-3 復原再建に向けて

資料の充実、建物調査の精度の高さ、部材調査による部材の残存と状態の良さの確認、これらを総合して復原再建は十分に可能である。設計者の大江新太郎、大正8年の改造を設計した田辺淳吉の残した建築は重要文化財をはじめ各地で文化財指定を受けている。このことから、川喜田久太夫（半泥子）本宅は貴重な文化遺産であり、当初建築地に復原再建され、良好な状態で保存・活用されることが望まれる。

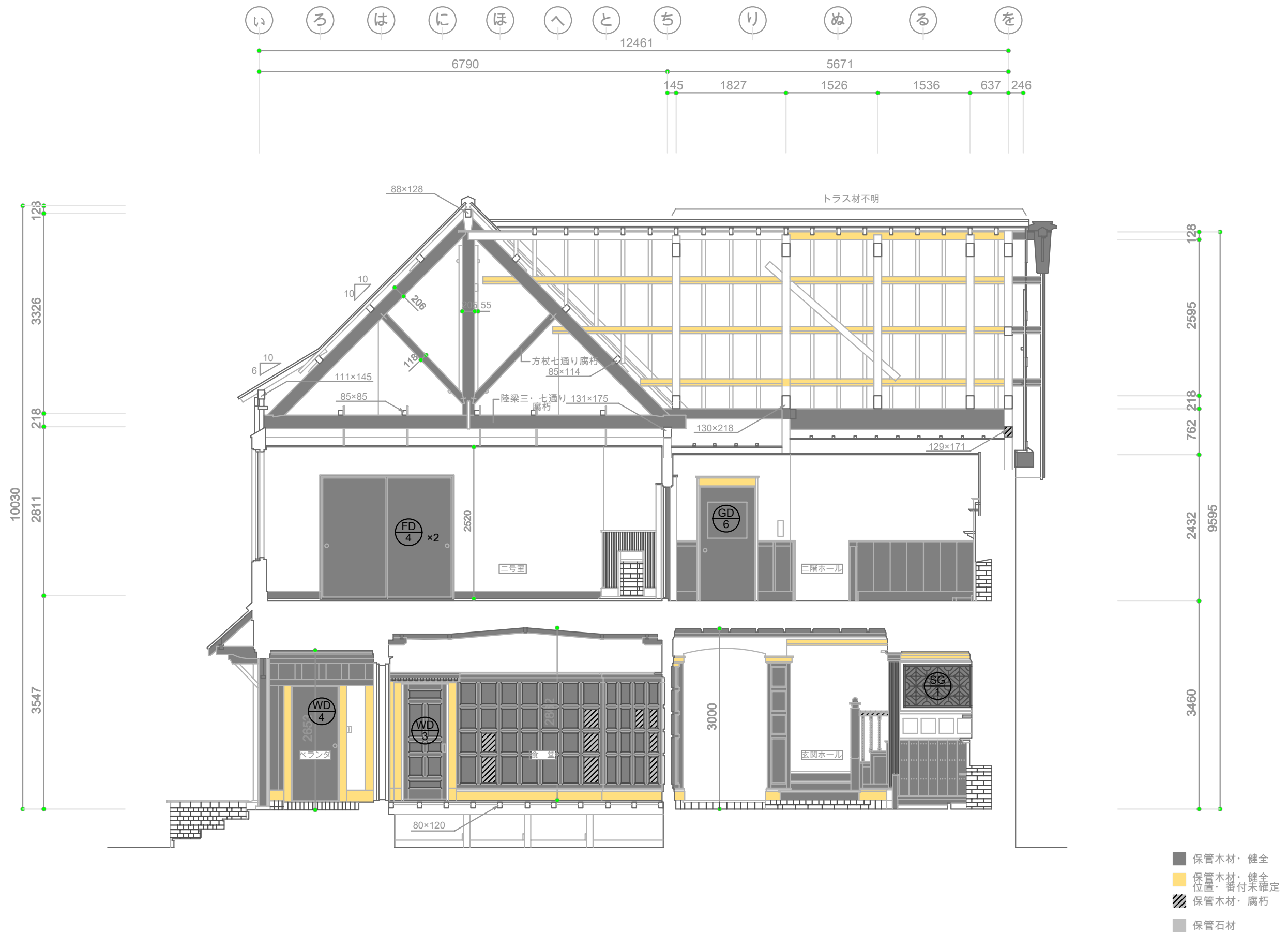
部材が保管されていない不明な当初仕様（屋根・壁・床・照明器具等）については、それに近い現代の材料・工法を用いても、残された部材の価値を損なうものではない。一部の仕様が不明、或いは再現不可能を理由に、再現可能な部材が放置されることの方が損失は大きい。不明部分の多い洋館二階の一号室・二号室などはこのことを理由に、使い勝手の良い事務室や展示室にあてるのが現実的ではないだろうか。



件名 川喜田久太夫 (半泥子) 本宅 部材調査		設計日	備考	
図面 洋館 一階平面図	設計	製図 2012.03	縮尺	図番 1



件名 川喜田久太夫 (半泥子) 本宅 部材調査		設計日	備考	
図面 洋館 二階平面図	設計	制図 2012.03	縮尺	図番 2



件名	川喜田久太夫 (半泥子) 本宅 部材調査		設計日	備考	
図面	洋館 左右 (A-A') 断面図	設計	製図 2012.03	縮尺	図番 3



件名 川喜田久太夫(半泥子)本宅 部材調査		設計日	備考	
図面 洋館 前後(B-B')断面図	設計	製図 2012.03	縮尺	図番 4



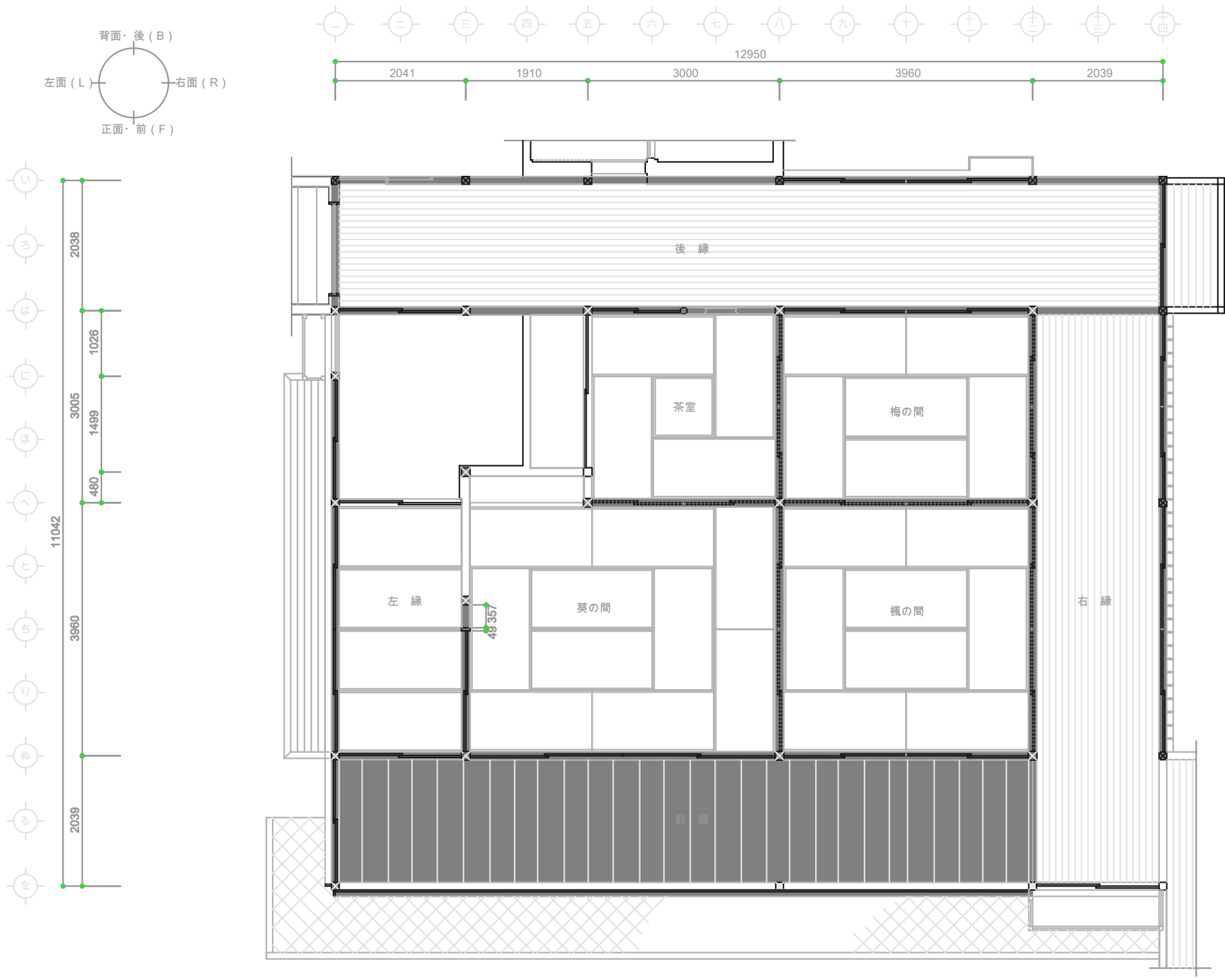
- 保管木材・健全
- 保管木材・健全
位置・番付未確定
- 保管木材・腐朽
- 保管石材

件名		設計日		備考	
川喜田久太夫（半泥子）本宅 部材調査					
図面	設計	図面	2012.03	縮尺	図番
洋館 正面立面図					5

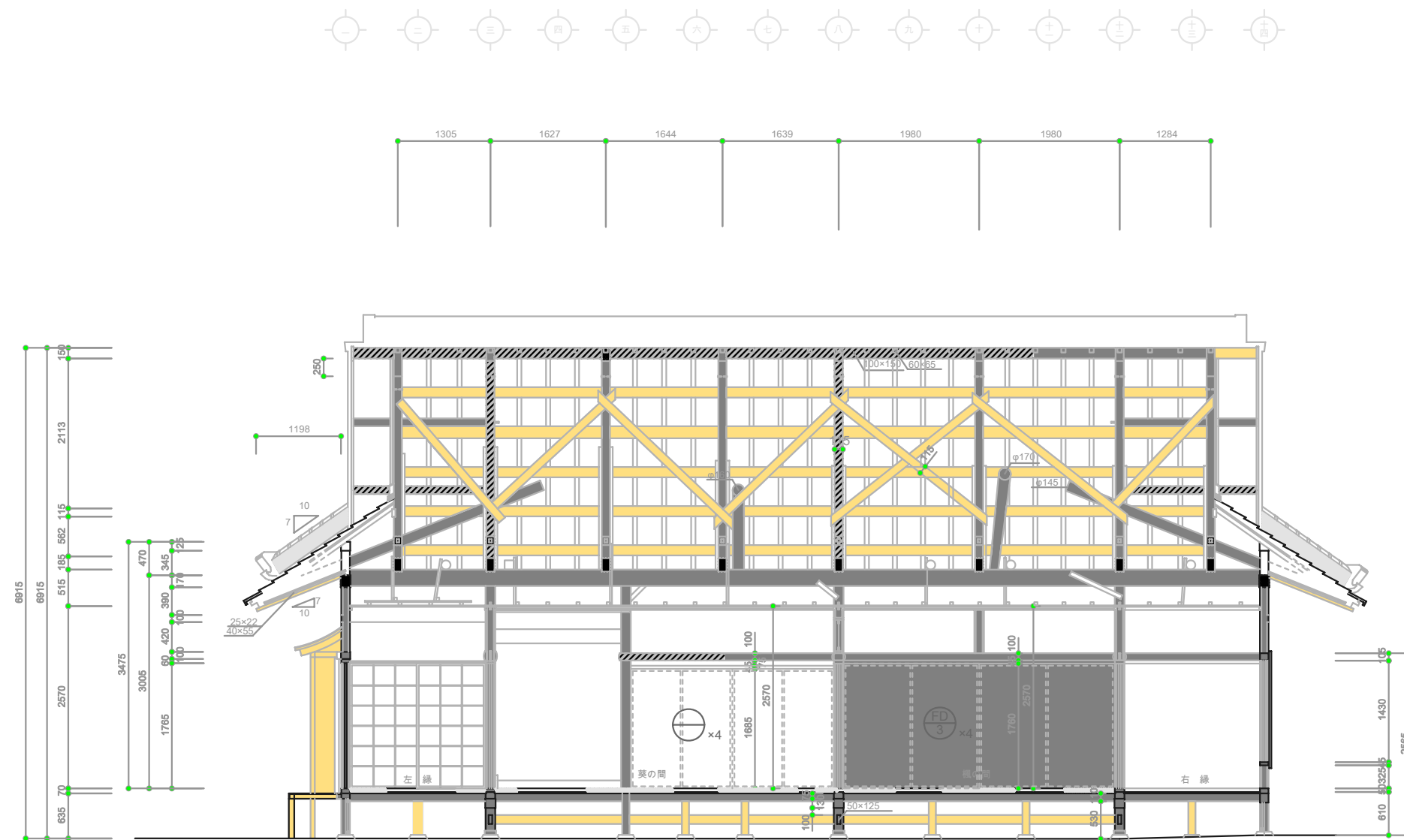


- 保管木材・健全
- 保管木材・健全
位置・番付未確定
- 保管木材・腐朽
- 保管石材

件名		設計日		備考	
川喜田久太夫 (半泥子) 本宅 部材調査					
図面	設計	年月	縮尺	図番	
洋館 左立面図		2012.03		6	

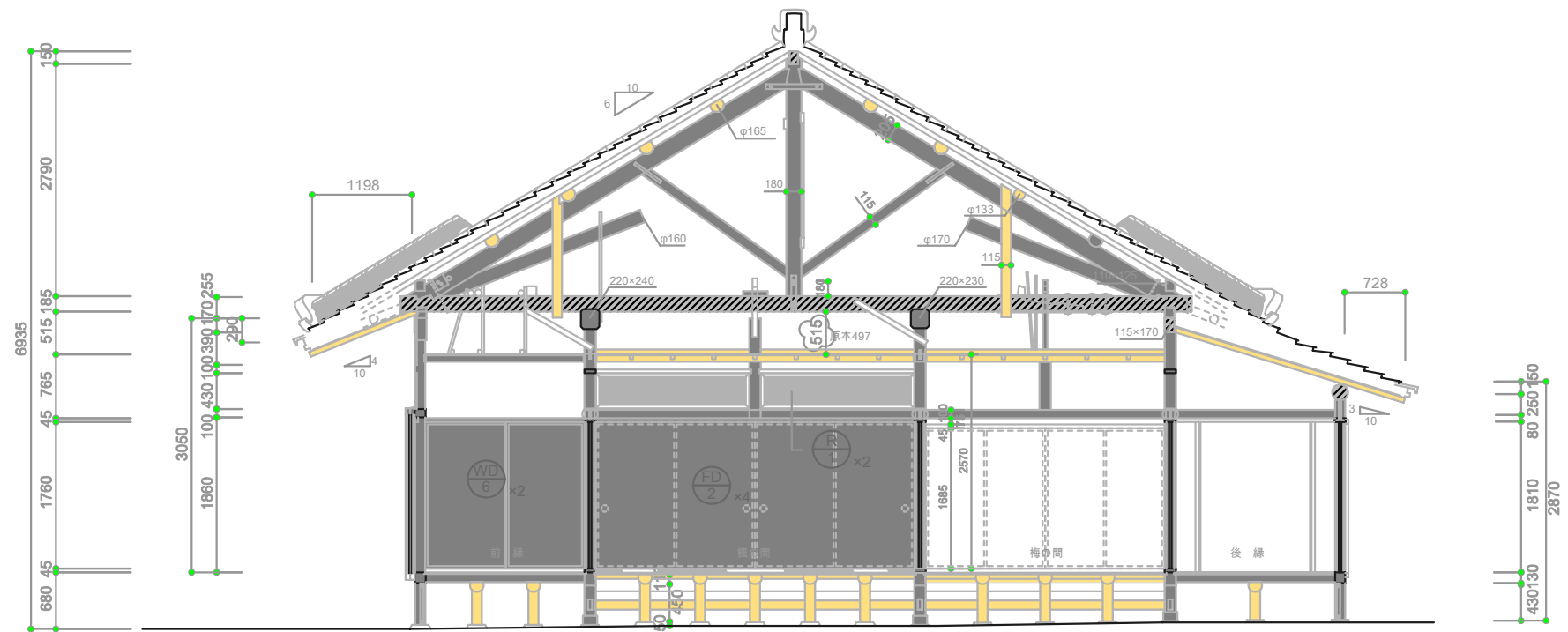
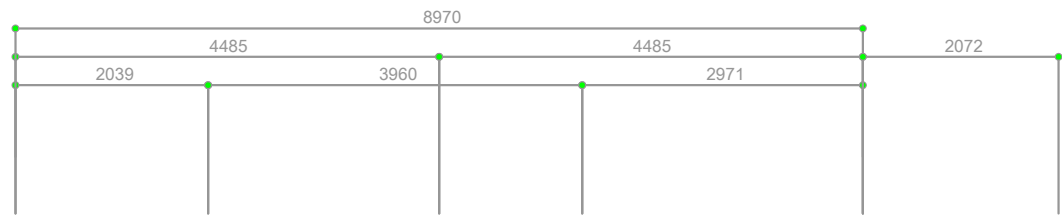


件名 川喜田久太夫 (半泥子) 本宅 部材調査		設計日	備考	
図名 和館 一階平面図	設計	年月 2012.03	縮尺	図番 7



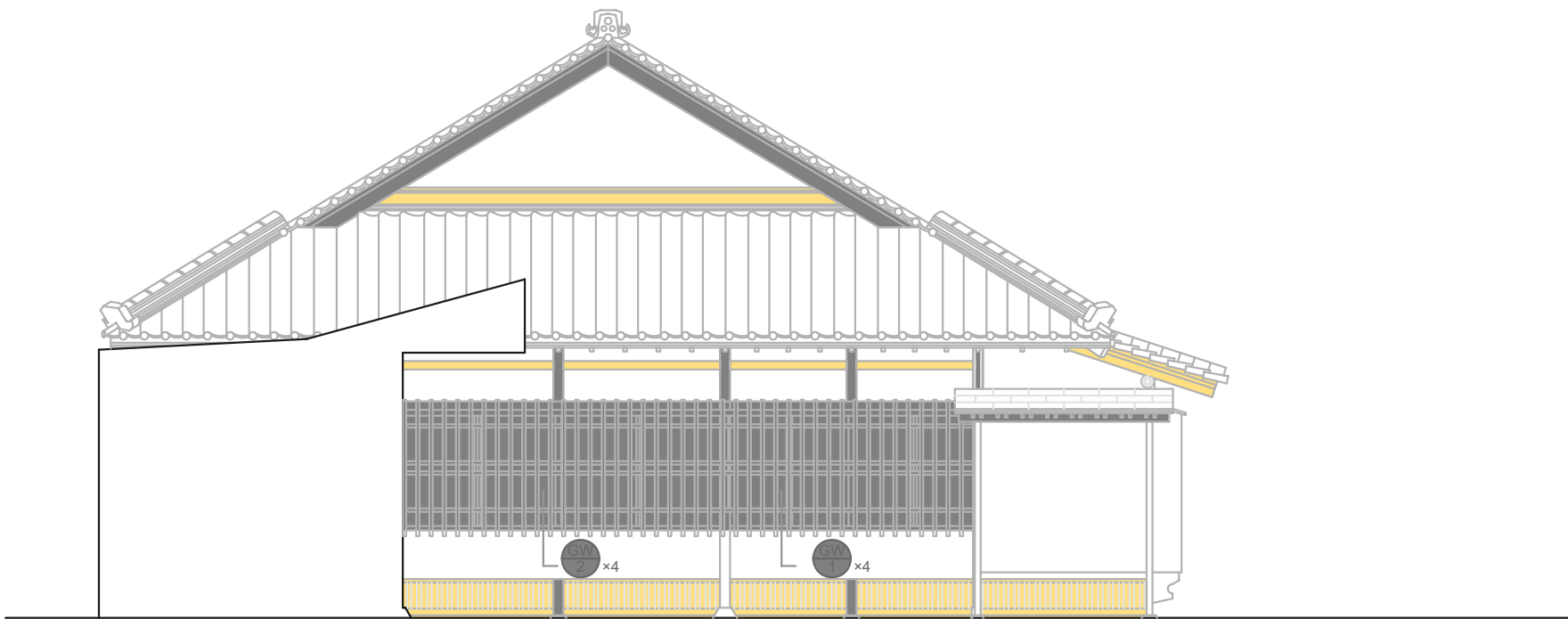
- 保管木材・健全
- 保管木材・健全 位置・番付未確定
- 保管木材・腐朽

件名	川喜田久太夫(半泥子)本宅 部材調査	設計日	備考
図名	和館 左右C-C'断面図	設計	図号
		2012.03	8



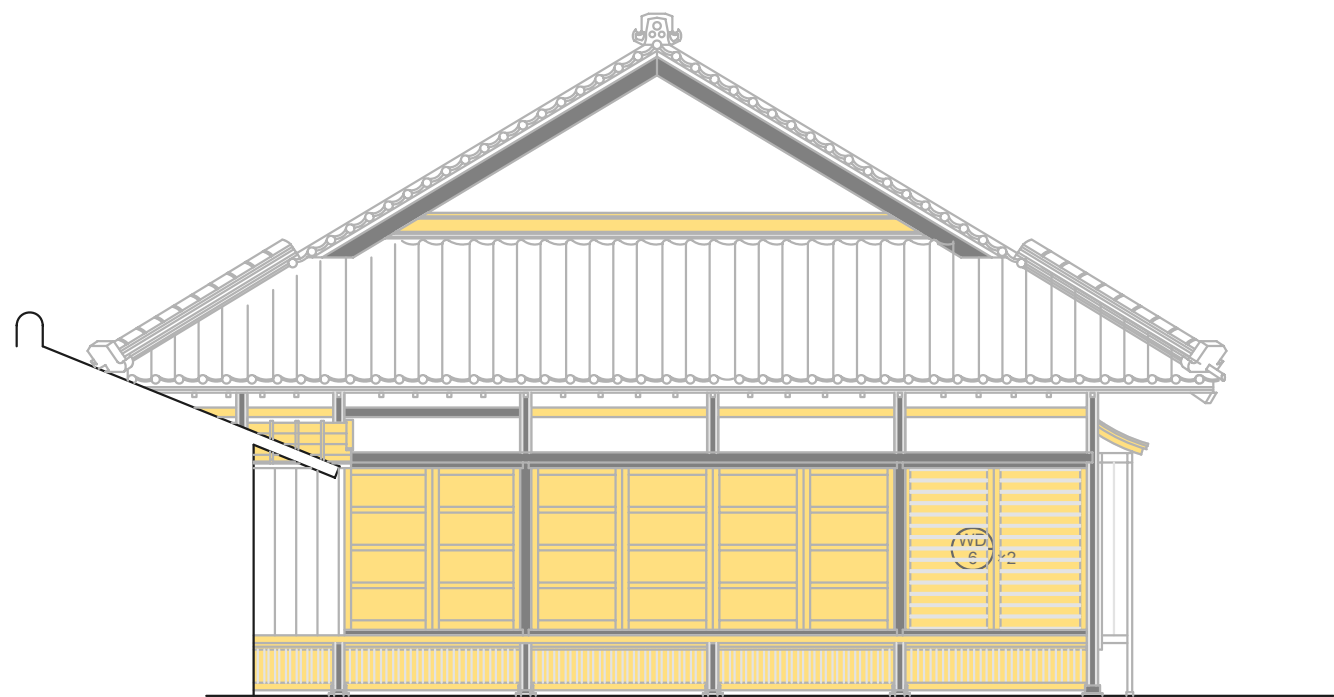
- 保管木材・健全
- 保管木材・健全
位置・番付未確定
- 保管木材・腐朽

件名	川喜田久太夫(半泥子)本宅 部材調査	設計日	備考
図名	和館 前後D-D'断面図	図番	2012.03
縮尺		図寸	9



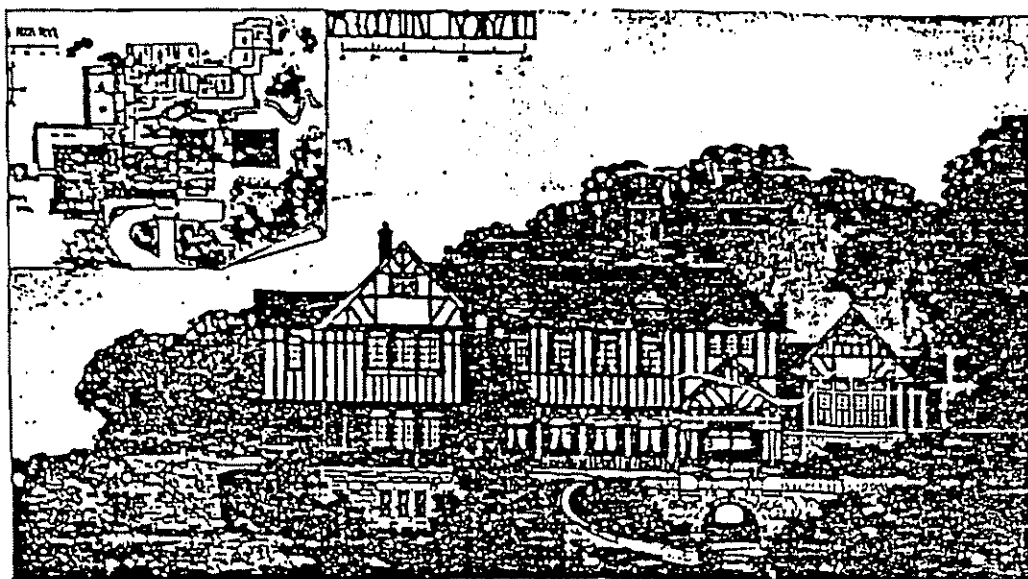
■ 保管木材・健全
■ 保管木材・健全
位置・番付未確定
/// 保管木材・腐朽

件名 川喜田久太夫(半泥子)本宅 部材調査		設計日	備考	
図面 和館 右立面図	設計	図面 2012.03	縮尺	図番 10



- 保管木材・健全
- 保管木材・健全
位置・番付未確定
- 保管木材・腐朽

名称		設計日		備考	
川喜田久太夫(半泥子)本宅 部材調査					
図面	和館 左立面図	設計	2012.03	縮尺	1/11



紳士住宅（山崎半蔵氏邸）
（東京市大田区）
大田区大田 大田氏邸

資料－1 紳士住宅『東京勸業展覧会出品作品図案集』抜粋（明治44年）



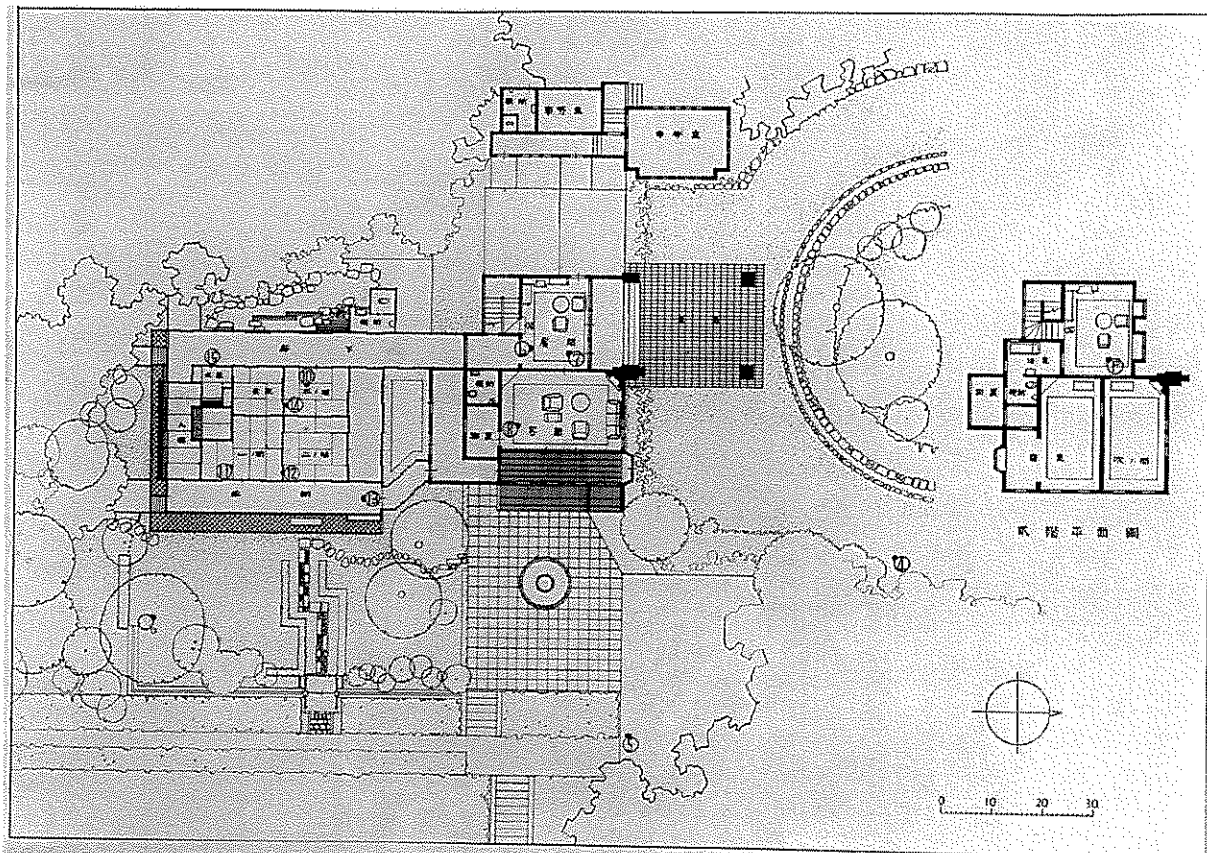
資料－2 『建築雑誌』抜粋（昭和10年9月）



資料- 3 K 氏邸 『住宅建築図集』 抜粋 (昭和 10 年、清水組)
資料- 2 に続く時期の状況を示す



資料- 4 K 氏邸 『住宅建築図集』 抜粋 (昭和 10 年、清水組)
資料- 2 に続く時期の状況を示す



追資料 1 平面図



追資料 2 無題、航空写真



追資料3 「玄関付近」



追資料4 「お館のベランダから洋館」



追資料5 「玄関付近から車よせを見る」



追資料6 無題、玄関内部の暖炉・階段が写る



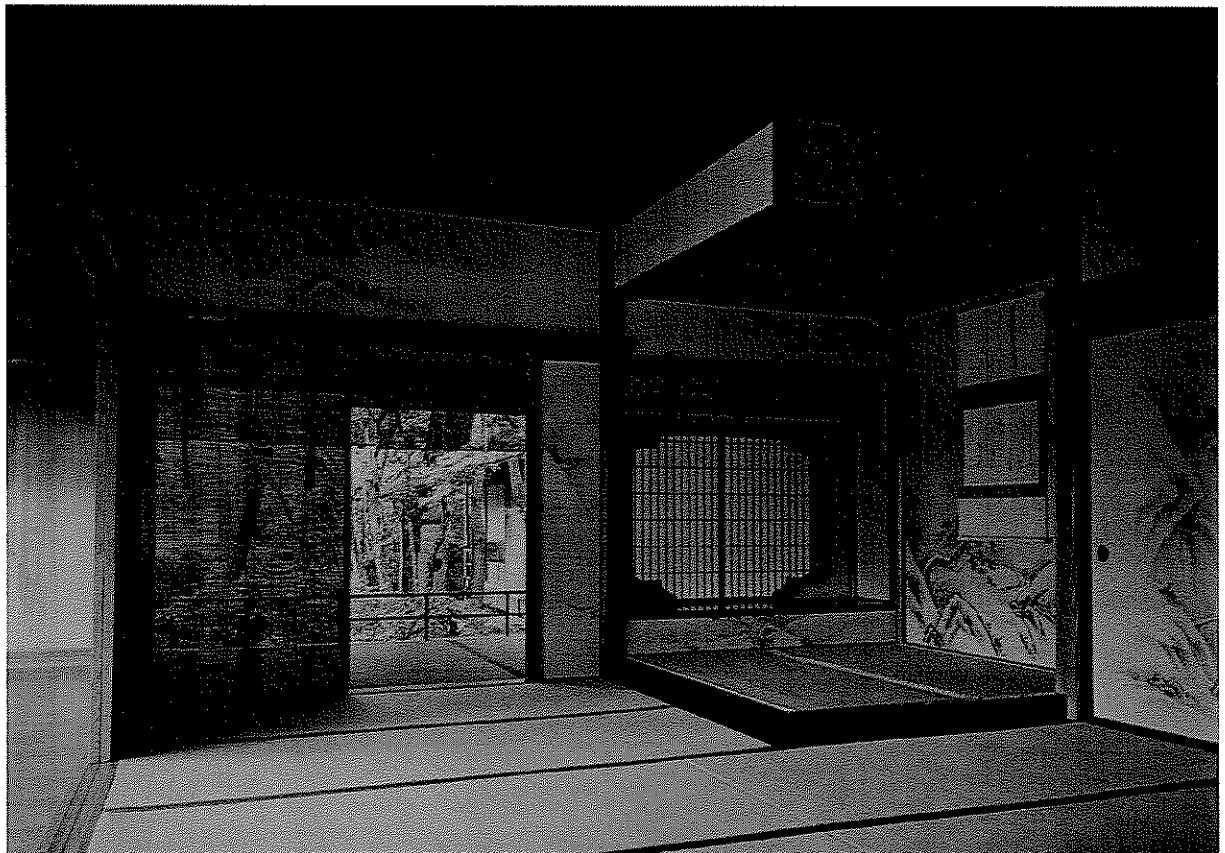
追資料7 「客間」



追資料8 「二階」



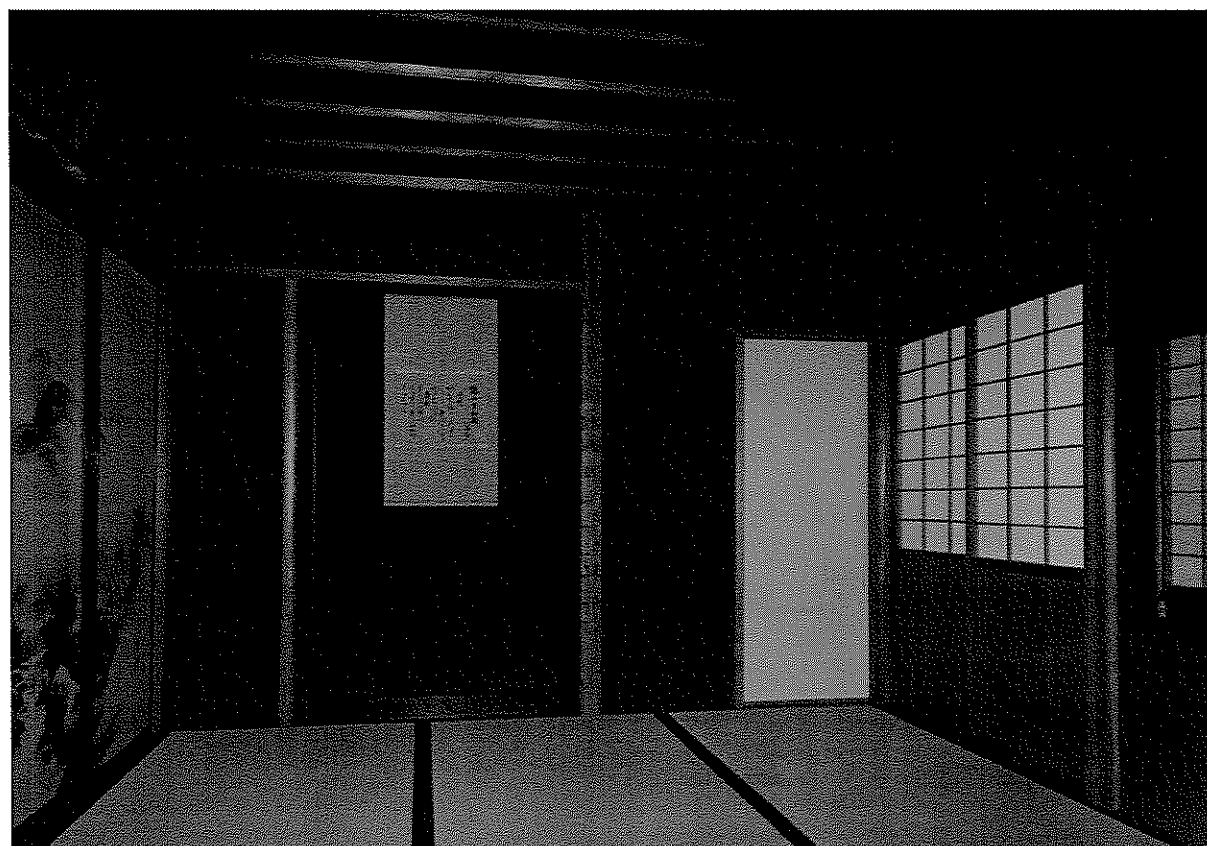
追資料9 「書院二之間より庭を見る」



追資料10 「書院座敷」



追資料11 「書院広縁」



追資料12 「書院之茶室」



追資料 13 注記「改修せざる前の千才山荘正宅」



追資料 14 注記「修繕せざる前の千才洋館」



追資料15



追資料16

